

岩手医科大学歯学会第74回例会抄録

日時：平成25年2月23日(土)午後1時より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室

教育講演

歯科治療時の精神鎮静法の応用

城 茂治

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
歯科麻酔学分野

近年、歯科治療環境が改善され、歯科治療時にさほど不快を感じることなく治療を受けられるようになった。しかし、幼少期の歯科治療時に不快を体験するとなかなか不快な記憶を払拭できず、歯科治療を受けられないあるいは受けてもいつも嫌な思いをするという患者も少なくない。また、比較的侵襲の大きな口腔外科手術やインプラント手術などは患者にとっては精神的、身体的負担が大きく、外来での処置が困難な場合もある。このような患者に対して快適で円滑な歯科治療をおこなうために、適切な薬物を用いて意識をとることなく歯科治療中の精神的緊張を和らげようとするのが精神鎮静法である。精神鎮静法には、低濃度の亜酸化窒素（笑気）を吸入する吸入鎮静法と静脈内に低濃度の静脈麻酔薬を投与する静脈内鎮静法がある。笑気吸入鎮静法は導入・覚醒も速く、歯科外来での処置に適していたためこれまで歯科ではよく用いられてきたが、最近では覚醒が速い静脈麻酔薬やそれを安全に使用するための装置が開発され、調節性にすぐれ、効果が確実でかつ不快な記憶も残らない健忘効果のある静脈内鎮静法が広く用いられるようになった。このような調節性に優れた静脈内鎮静法の発展により、これまで不安、恐怖心が強くて歯科治療を敬遠していた患者も積極的に治療が受けられるようになるばかりでなく、これまでも通常に歯科治療を受けていた患者が、より快適で安全な歯科治療のために静脈内鎮静法を希望して受診するようになっている。今回、歯学会で教育講演の機

会を与えていただいたので、改めて精神鎮静法について総括し、当教室での研究も紹介しながら精神鎮静法の在り方、今後の展開についても考察した。

優秀論文賞受賞講演

1. 現在の外科的矯正治療について

佐藤 和朗

岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座
歯科矯正学分野

当科における外科的矯正治療の適用となる患者の診断は「顎変形症」となるが、その不正症状は多岐にわたっている。最も多い不正症状は、下顎骨の過成長、上顎骨の劣成長や上下顎骨の前後的位置異常を含む反対咬合であり、顔面の非対称を含む場合も少なくない。さらに「顎変形症」は、顎骨の形態・位置異常によって診断されるが、患者の多くは咀嚼機能や発音機能などに機能的障害を併発していることが多い。

このような形態的・機能的障害を伴う「顎変形症」の治療では、下顎骨に対する顎骨形成術の一つである下顎枝矢状分割術が最も多く適用される術式であり、下顎骨単独もしくは上下顎同時移動で顎態や咬合の改善を図っている。論文「下顎枝矢状分割術における生体内吸収性ポリ-L-乳酸 (PLLA) 骨接合ミニプレート固定の術後安定性について」は、離断した顎骨の固定法の違いで、顎骨形成術後の顎態や咬合の安定性に差異があるか否かを考察したものであるが、金属プレートおよび PLLA プレートそれぞれで固定した患者の比較では、顎骨形成術後1年での著しい後戻り様変化は両者ともに認めないことが確認された。下顎枝矢状分割術を用いた左右差のない下顎後退術に対する PLLA ミ